

1. 橋立地区と黒崎町、深田町

鹿 野 勝 彦

- I はじめに
- II 加賀市橋立地区
- III 黒崎町と深田町
- IV おわりに

I は じ め に

金沢大学文学部文化人類学研究室では、1995年度の3年次学生を主対象とする調査実習を、石川県加賀市橋立地区^{はしたて}の2つの集落、黒崎町、深田町において実施した。本報告書はこの調査実習に参加したメンバーが執筆した報告によって構成されており、当研究室の調査実習報告書としては11冊目のものになる。調査実習の目的、方法や、そのまとめとしての報告書の作成意図等は、基本的には前年度までのそれを踏襲しており、すでに刊行した報告書でも何度か述べたことがあるので、ここではくり返さない。¹⁾ 調査実習の参加者と調査の日程については、巻末の「おわりに」で記したとおりであるが、現地調査に入る以前の、3年次学生が進学した直後の4月から、本調査に入る直前の7月にかけて、調査方法の指導や文献、統計資料の収集、分析などを、予備調査と併行して行い、また本調査終了後も補充調査を行いながら、何回か参加者全員による収集資料の検討、意見交換を行ってきたことも例年通りである。

調査対象集落については、当初加賀市の市域の周辺部から、集落規模50～100世帯前後で、ここ数十年間については比較的人口の流動性が低いと思われる2つの集落を選ぶ方針でのぞんだ。この方針は、はじめて実地調査を行う学生にとっての取り組みやすさと、参加予定学生が13名で、少なくとも2班に分けることが適当と考えたためであり、それ以上の深い理由はない。予備調査の段階で候補地となっていたいくつかの地区、集落のうちから、最終的に橋立地区の黒崎町と深田町を対象としたのは、橋立地区が、比較的狭い地区の範囲内に、各々に個性的な集落が併存していて興味深く思われたこと、調査の実施について、幸いに積極的な協力を得られる見通しがたったこと、などによる。

本報告書でも、従来のそれと同じく、2章以下の各論では、それぞれの執筆者が特に関心をもったテーマに基づいて執筆しているので、それらの全体として橋立地区や黒崎町、深田町についての網羅的、体系的な記述がなされているわけではない。そこでこの序章では、橋立地区と黒崎町、深田町について、立地、行政上の位置づけ、人口と世帯、生業と生活一般について、最小限の記述を行ったうえで、地区と集落の特徴について若干の指摘を行い、以下の黒崎町、深田町を個別に対象とする各論への導入としたい。

Ⅱ 加賀市橋立地区

加賀市は石川県の西端に位置するが、橋立地区は加賀市北部にあって、北は日本海に面し、東は金明地区、南と西は大聖寺地区と境界を接している。海岸部には橋立丘陵とよばれる、標高40～70mの台地が、東北から南西に約6kmにわたってのびており、上部はおもに松林で、海に面した側は切りたつた海食崖を形成している。丘陵の南側は複雑な起伏をみせる台地となっていて、この台地をおおむね北流する田尻川、小塩川とその支流、および散在する多数の溜池の周辺の低地には水田が、台地上には畑地、果樹園と雑木林、松林がひろがっている。

地区内には、1995年現在、9つの集落がある。橋立丘陵の東端に近い、田尻川と小塩川の河口の海岸に連続的に立地する田尻町、小塩町、橋立町、丘陵南面台地に散在する宮町、深田町、黒崎町、高尾町、豊町、および丘陵西端の海岸に位置する片野町である。これらのうち、1968（昭和43）年に黒崎、高尾などから分離して出来た豊町をのぞく8つの集落は、いずれも藩政時代から1889（明治22）年までは独立した行政単位としての村であったが、同年、田尻、宮、深田、黒崎、高尾、片野が黒崎村として、小塩、橋立が橋立村として統合され、1930（昭和5）年には両村は合併して橋立村となり、1952年に村が町に移行したのち、1958年に加賀市の発足にともなってその一部となった。

交通路としては、これらの集落を結ぶように、県道深田・片野・下福田線、県道小塩・潮津線、主要地方道橋立港線などが通じている他、地区の南部をかすめるように北陸自動車道がはしっている。また、その南にはJR北陸本線がのびており、加賀市の中心地である大聖寺地区の大聖寺駅、および特急停車駅で、片山津、山代、山中温泉などの起点となる加賀温泉駅へは、地区から直線距離で5～6kmたらずである。ただ、集落と地区を結ぶ公共交通機関としてのバスは、大聖寺駅、片山津温泉を起点とし、地区を経由して運行されているが、便数は多くない。

地区を構成する9つの集落の世帯数と人口の動態を、得られる資料からまとめると、表-1のようになる。これらの集落は、規模も異なり、その性格も後述するようにさまざまであるが、全体としては加賀市の中で橋立地区として、ある程度のまとまりを維持している。すなわち地区は小塩にある市立橋立中学校への通学区域（いわゆる校下）であり、この地区を管轄する市役所出張所も橋立におかれている。また橋立にはやはり地区全体を対象とする橋立地区公民館、農村環境整備センターといった施設がおかれ、JA加賀市、加賀市漁業協同組合も、それぞれ地区を対象とした支所を深田、小塩においている。やはり橋立におかれている警察官駐在所、郵便局なども、基本的には橋立地区を管轄している。そしてこれらに対応する地区住民の組織として、地区の総括的な方針を策定する役割をになう「橋立地区まちづくり推進協議会」をはじめとして、区長会、社会福祉協議会、公民館、交通安全協会、消防分団（加賀市消防団の下部組織）、中学校育友会、老人会、婦人会などがある。

一方、個々の集落は、規模の大小にかかわらず、独立した自治組織であると同時に、行政の末

表－1 橋立地区集落の世帯数、人口、世帯人数（平均）

集落名	項 目	1889 (明治22)	1920 (大正 9)	1956 (昭和31)	1965 (昭和40)	1970 (昭和45)	1975 (昭和50)	1980 (昭和55)	1985 (昭和60)	1990 (平成 2)
田 尻	世帯数	84	174	211	210	217	225	236	251	244
	人 口	435	669	1,030	910	941	985	1,024	1,020	994
	世帯人数	5.2	3.8	4.9	4.3	4.3	4.4	4.3	4.1	4.1
小 塩	世帯数	101	155	182	187	185	183	181	175	178
	人 口	538	627	848	783	763	755	743	712	696
	世帯人数	5.3	4.0	4.7	4.2	4.1	4.1	4.1	4.1	3.9
橋 立	世帯数	201	129	113	114	112	115	121	119	125
	人 口	856	474	516	486	419	443	460	444	445
	世帯人数	4.3	3.7	4.6	4.3	3.7	3.9	3.8	3.7	3.6
宮	世帯数	19	17	15	13	13	13	14	17	17
	人 口	88	79	75	60	53	59	62	73	81
	世帯人数	4.6	4.6	5.0	4.6	4.1	4.5	4.4	4.3	4.8
深 田	世帯数	63	54	49	49	49	52	50	52	54
	人 口	369	244	258	240	225	218	214	248	254
	世帯人数	5.9	4.5	5.3	4.9	4.6	4.2	4.3	4.8	4.7
黒 崎	世帯数	106	89	95	101	93	96	102	101	104
	人 口	559	403	486	447	402	408	456	465	481
	世帯人数	5.3	4.5	5.1	4.4	4.3	4.3	4.5	4.6	4.6
高 尾	世帯数	70	48	69	72	85	75	77	71	66
	人 口	315	238	397	376	433	418	391	402	379
	世帯人数	4.5	5.0	5.8	5.2	5.1	5.6	5.1	5.6	5.7
片 野	世帯数	63	70	57	53	52	50	52	53	48
	人 口	369	211	260	224	205	191	219	217	201
	世帯人数	5.9	3.0	4.6	4.2	3.9	3.8	4.2	4.1	4.2
豊	世帯数							7	5	5
	人 口							34	24	25
	世帯人数							4.9	4.8	5.0

資料出所 1889、1920『日本地名大辞典石川県』、1956『橋立町の歴史』、1965～1990国勢調査

端として伝達機能もになる区を構成している。区は各々に区長以下の役職者を選出し、区費を徴収するとともに、区自体としても、区の一定の年齢、性の構成員によって組織される老人会、壮年団、婦人会、青年会、子供会、自衛消防団といった団体としても、さまざまな活動を展開している。そのような活動の場としての公民館ないし集会所は、いずれの区も、独自に所有している。また、1960年代に新たに成立した豊町を除く集落には、各々の住民を氏子とする産土の神社があって、その祭礼は、事実上、区の年間の最大の行事となっている。また、農業や漁業を重要な生業

とする区においては、区の住民でそれらの活動に従事している成員によって組織される生産組合、漁業組合などが、さまざまな事業、活動を行ってゆくうえでの基礎単位としての役割を果たしている。

こういった地区と個々の集落の間にある施設として重要な意味をもっているのが、地区内に2つずつある小学校と保育所であろう。小学校は橋立小学校が小塩に、黒崎小学校が黒崎にあるが、そのうち後者は黒崎、片野が、前者はそれ以外の集落が、通学区域となっている。一方、保育所については、やはり橋立保育所が小塩に、橋立南保育所が黒崎にあって、後者の通学区域は黒崎、深田、片野で、前者がその他となっている。それぞれの小学校、保育所には、育友会、保護者の会などがあるが、とりわけ黒崎小学校の校下の集落においては、その範囲で独立した小学校を維持しようという意識が強くみられるようである。要するに1958年までの旧橋立町の町域からなる橋立地区と、1889年までの旧村としての集落とは、現在もそれぞれに個有の組織と活動、機能をかなり強固に維持していることを、とりあえず確認しておきたい。

ところで、これらの集落の性格は、それぞれに個性的であり、相互に著しく異なっている。たとえば、地区の集落のいくつかで、かつて基幹的な生業であった農業、漁業について、集落における農家、漁家数とその比率、農家の専・兼業状況、耕地のありかたなどをまとめてみると、表-2のようになる（ただし豊町については、1980年以降の資料が、高尾町に含まれている）。以下では各集落の立地と、表-1、2を主な手がかりとして、地区の集落の特徴とその変化を、特に1960年代以降について、検討してみる。

橋立地区を構成する9つの集落は、すでに述べたように、地理的には3つのグループに分かれる。これらのうち、田尻、小塩、橋立は地区東部の海岸に、1920年以降に整備された橋立漁港を囲むように連続して立地しており、外部の者には境界は識別しがたいが、集落としての性格は、必ずしも共通性が高いとはいえない。すなわち田尻、小塩ではもともと農家の比率が低く、漁業がより重要であったが、小塩は地区の商業地域としての性格ももっていて、商業、サービス業従事者の比率も比較的高かった。一方、橋立は、かつて北前船主を輩出した村として盛名を馳せたが、近年に限れば、1960年ごろまではむしろより農業の比重の高い集落であるとともに、地区の行政の中心地でもあった。こういった各々の特徴は、今日でもある程度残されてはいる。しかし、表-2に見るように、農業や漁業の生業としての地位は、いずれの集落でも1960年代から1970年以降一般に低下し、商業にしても、自家用車の普及にともなう住民の行動域の拡大によって、地区の商店は地元住民の顧客を失いつつある。かわって大聖寺や片山津などをはじめとする加賀市内の温泉地、あるいは小松市などへの通勤賃労働や、繊維関係、土建、自動車修理、鉄工所など小規模な自営業の経営が、いずれの集落においても、生活を支える主要な職業としての地位を占めるようになってきた。ただしこの変化は橋立地区内のいずれの集落においても、ほぼ共通して見られるといえてよい。

表-2 橋立地区集落の農家、漁家

集落名	年度	世帯数(A)	農家数(B)	農家率(B/A) (%)	専・兼業農家数			耕地面積 (ha)			漁家数(C)	漁家率(C/A) (%)
					専	1 兼	2 兼	田	樹園	畑		
田 尻	1960	211	61	28.9	9	29	23	22.6	1.8	8.8	N.A.	
	1970	217	50	23.0	0	19	31	46.5	0.9	1.3	125	57.6
	1980	236	26	11.0	0	3	23	29.2	1.5	0.3	56	23.7
	1990	244	19	7.8	0	2	17	30.4	1.8	0.7	N.A.	
小 塩	1960	195	34	17.4	4	4	26	5.1	0.7	4.7	N.A.	
	1970	185	19	10.3	0	0	19	5.6	0	0.5	90	48.6
	1980	181	9	5.0	0	0	9	5.3	0	0.2	65	35.9
	1990	178	8	4.5	0	0	8	4.7	0	0	N.A.	
橋 立	1960	112	60	53.6	6	8	46	5.6	0	10.9	N.A.	
	1970	112	26	23.2	2	5	19	6.7	0.8	2.6	18	16.1
	1980	121	9	7.4	0	0	9	3.0	0	0	23	19.0
	1990	125	5	4.0	0	0	5	2.0	0	0	N.A.	
宮	1960	13	13	100	3	3	7	4.6	0	0.2	N.A.	
	1970	13	12	92.3	1	4	7	10.7	0	0.1	0	0
	1980	14	6	42.9	0	0	6	5.3	0	0.3	0	0
	1990	17	9	52.9	0	0	9	9.2	0	0.3	N.A.	
深 田	1960	49	44	89.8	15	7	22	16.1	1.2	7.7	N.A.	
	1970	49	44	89.8	2	11	31	24.6	2.1	3.9	0	0
	1980	50	33	66.0	0	1	32	19.7	2.9	0	0	0
	1990	54	25	46.3	2	0	23	21.0	0.5	1.4	N.A.	
黒 崎	1960	100	87	87.0	25	43	19	31.4	8.3	29.7	N.A.	
	1970	93	79	84.9	2	26	51	40.9	9.3	12.5	15	16.1
	1980	102	62	60.8	5	1	56	34.1	1.3	3.6	4	3.9
	1990	104	44	42.3	5	5	34	40.5	5.1	2.4	N.A.	
高 尾	1960	66	42	63.6	22	14	6	21.7	5.1	4.3	N.A.	
	1970	85	41	48.2	1	15	25	28.5	5.9	1.6	0	0
	1980	77	33	42.9	3	10	20	23.6	11.9	0.6	0	0
	1990	66	28	42.4	5	9	14	38.0	18.7	0.6	N.A.	
片 野	1960	58	52	89.7	9	22	21	21.1	0	2.0	N.A.	
	1970	52	46	88.5	0	7	39	26.0	3.5	1.4	13	25.0
	1980	52	37	71.2	3	0	34	18.0	2.1	0.9	0	0
	1990	48	22	45.8	0	2	20	22.9	1.1	0.7	N.A.	

資料出所 『農業センサス』、『世界農林業センサス』農業集落カード

ただし世帯数は1960以外は国勢調査による。豊町については独自資料なし

次に橋立丘陵南面の台地に散在する、宮、深田、黒崎、高尾、豊町の5つの集落についてみてみよう。これらの集落においては、農業は1960年代までは文字通り基幹的な生業であった。ただ、これらの集落の農業は、もともと耕地、特に水田の面積が狭小で水利条件がよくないという点で

共通だったとはいえ、水田と畑地、樹園などの比率は、相互にかなり異なっていた。水田面積は、いずれの集落においても、1960年代後半に基盤整備事業などを行った結果、拡大しているが、それでも農家1世帯あたりの平均水田所有面積が1haを超える集落は、1980年までの時点では存在しない。またこれらの集落のうち、黒崎では磯での海藻、貝類採取を主とする漁業が、高尾では果樹栽培が、一部の世帯では、かなり重要な意味をもっていた。そしてここでも一般に農家、漁家の数や比率は、1970年代以降急速に減少、低下し、副業化してゆくのだが、ただ高尾のみでは、農家率こそやや低いものの、果樹栽培を主に行う専業、1種兼業農家が、現在もなお一定数存在することは、注目に価する。

地区西端の海岸に位置する片野は、元来半農半漁村的性格をもつ集落であり、同時に船員として長期間集落をはなれて働く人の多いことが特徴であったが、ここでも漁業は1980年代には姿を消し、農家のほとんどは2種兼業化するとともに、通勤賃労働が大部分の世帯の経済を支える、主たる職業となってきている。

以上からあらためて地区全体をみると、1950年代後半以降、ほとんどの集落において、世帯数はほぼ横ばい、ないし増加しており、人口についても、少子化にともなう世帯規模の縮小を反映して、やや減少気味のところが多いとはいえ、その傾向は著しくない。すなわち1990年の時点でも、1世帯あたりの平均人数は、小塩と橋立を除けば4人以上を維持している。生業面からは、一般的には海岸に立地する集落での漁業や、台地上の集落での農業の地位が、とりわけ1970年代以降しだいに後退し、通勤賃労働や小規模な自営業がより重要性を増してきたといえる。また近年では、田尻、橋立、黒崎、片野などにおいては、観光業への期待が高まり、夏期を主とする海水浴場ばかりでなく、通年型の観光地をめざして美術館、博物館や遊歩道、あるいは観光果樹園、レストラン、喫茶店、土産物店などの関連施設が徐々に整備されつつあり、北浜（田尻、小塩）、橋立、黒崎、片野の各々に観光協会が組織されている。さらに後述するように、最近になって地区内に、外部資本によるテーマパークの建設を受け入れ、1996年にはオープンすることにもなっている。観光業は今日までのところ、地区全体としてみれば、なおさほど重要な地位を占めているとまではいえないが、近隣に温泉郷があることから、今後地区ないし一部の集落にとって、より大きな比重をもつようになる可能性はあると考えられる。

ところでこういった変化の経過にしても、またその結果としての現状にしても、かつての生業形態がそうであったように、集落ごとにみるとその間には一定の相違があり、かつその違いは必ずしもその集落が海岸に位置するか、台地上にあるかといった、立地条件ばかりに規定されてきたわけではない。本稿では橋立地区のすべての集落について、その個別の特徴を検討するだけの用意がないが、次節では黒崎と深田に限って、やや詳細に考えてみることにする。

Ⅲ 黒崎町と深田町

黒崎と深田は、すでに述べたように、いずれも橋立丘陵南面の台地上に、隣接して立地する、もともとは農村としての性格の強い集落であったが、各々の立地条件は若干異なっていた。黒崎の場合、現在の集落は橋立丘陵の南麓から南の平坦な台地へと広がっているが、この台地部の宅地は1970年代に入ってから造成されたもので、かつては山裾にはりつくように家並みが連なっており、かなり起伏のある台地部分は松や雑木林と桑畑、それに小麦、甘薯等を主作物とする畑地、谷筋の低地が狭小な水田となっていた。一般に水利も悪く、1960年当時には、水田は農家1戸あたり平均0.3ha余り、畑地と樹園は同じく0.4ha余りでしかなかった。したがって、農業のみによって世帯を維持してゆくことは、当時においても相当に困難であり、漁業や賃労働、その他の副業が、早くから重要な役割を果たしていた。

漁業としては、集落背後の丘陵を越えた浜の地先の海での小規模な刺網業と、その東西にのびる磯での海藻、貝類の採取が主で、特に磯漁の産物は、各々が大聖寺へ運んで戸別に直接売り歩くことにより、重要な現金収入をもたらしていた。賃労働としては、1900年代ははじめからまず大聖寺とその周辺で、やや後には黒崎地内にも、繊維関係の工場が成立し、主に女性がそこに通うようになった。また薫製品の製造は、1950年代までは冬期の農家の副業として、一定の役割を果たしていた。他にも、第2次大戦後の一時期さかんだった丘陵部の林を燃料として海水から塩を採る「潮たき」のような副業もあった。

一方、深田は小塩川沿いの、前後に丘陵をひかえる低地に立地しており、水田は排水の困難な湿田が主で、その1戸あたりの面積も黒崎とさして変わらず、畑地にいたってはさらに狭隘であったから、養蚕、タバコや果樹栽培なども、黒崎と同じく、ある時期さかんに行われたが、やはり農業だけで生活を維持してゆくことは困難であった。また、ここには集落の地先の海岸がないため、漁業従事者ももともと存在しなかった。

深田において、農業とならぶ重要な生業は、石工、大工などの職人仕事であった。これらは少なくとも19世紀末（明治前半）には、深田を特徴づける職業として成立しており、現在の加賀市一帯から福井県金津町の方面にまで知られていたが、とりわけ橋立などに住む北前船主をパトロンとし、その屋敷の建築、造作などを請けおうことによって、安定した収入を得ていた。その仕事の一部は、現在も橋立のかつての船主の屋敷に残されている。深田には、こういった石工、大工などを代々継承してきたイエも多く、顧客も引きつがれていたという。こういったパトロンとの関係は、北前船の衰退とともに失われていったが、石工、大工の仕事自体は、今日まで深田の、いわば伝統的な職業とみなされている。

1960年代に入ると、橋立地区ではいわゆる農業の基盤整備事業が活発に行われるようになり、山林の耕地化、畑地の水田化や水利施設の改善などがすすむとともに、機械の導入も積極的になされるようになった。しかしその反面では、高度経済成長にともない、この地区でも農家の絶対

数の減少と、2種兼業化とが、急速に進んだ。もっとも黒崎、深田では、農家数と、集落の全体世帯に占める農家の比率の減少は、地区内の他の多くの集落に比べれば、なおゆるやかではあるが、それでも1970年には80%以上を占めていた農家は、1980年には60%台に、1990年には40%台に減少し、かつそのほとんどは、1980年にはすでに2種兼業化している（表-2参照）。また黒崎において、1970年ごろには、漁業はなお一定の生業としての意味をもっていたが、今日では磯漁はなお半ば趣味として続けられているものの、職業として行っている世帯はなくなった。

ところで、この間、黒崎、深田のいずれにおいても、世帯数と人口は増加しており、かつ世帯の転出入はほとんどない（つまり世帯数、人口の増加は、集落内での分出による）から、農家のありかたの変化は、在来の農家のうちの相当数が農業を行わなくなり、あるいは専業、1種兼業農家が2種兼業化したことを意味している。ただしここでは、いわゆる過疎化した地域の場合と異なり、世帯の多くは、なお直系家族的構成を維持している。そのことは世帯の平均人数が、黒崎、深田のいずれにおいても、なお4.6~4.7人であることに示されている（表-1参照）。

これら非農家や2種兼業農家の生活を支えているのは、いうまでもなく、通勤による賃金労働と、比較的小規模な自営業である。このうち前者は、特に1960年代後半以降の交通事情の改善によるところが大きい。黒崎、深田にバス路線が開通したのは1966年であるが、1970年代に入ると自家用の乗用車が普及したことにより、通勤圏はさらに著しく拡大した。1960年前後まで、賃労働の場合は、地区内の小規模な機業、建設業などの他は、大聖寺、片山津といった都市部にしかなく、通勤はかなり困難だったのである。通勤圏の拡大は従事する職種の多様化をも意味する。一世帯内から複数の成員が、それぞれ個別に働きに出ることは当然のようになり、それにともなって農作業の一部ないし全部を他に委託する農家も増えてきた。これらの世帯では、もはや農業は収入を得る手段ではなくなっている。とはいえその一方で、自家用の飯米を確保するためだけでも、農家として水田を所有し続けるべきだという考え方も、根強く残されているのである。こういった考え方は、小規模な自営業を営む世帯にも、おおむね共通している。そして、これと対応するように、少数ながら農作業を積極的に受託し、農業の経営規模を拡大しようとする専業農家も、近年では出現しはじめている。

自営業についてみると、今日でも黒崎では繊維関連、板金加工などの業種が、深田では建築関係の業種が比較的多く、かつての集落の特徴を多少残しているともいえる。しかし全体としてみれば、各々の集落の独自性は薄れ、地方都市への通勤圏に位置する農村集落に共通する性格を強めてきているようにみえる。すなわち、黒崎でも深田でも、世帯は一般に直系家族から構成され、主たる収入は通勤による賃労働、ないし自営業から得ていて、既婚者のうち、60歳代以上の高齢者を除くほとんどは、なんらかの形で就業している。世帯の大半は現在も農家として、主に水田を所有しているが、農業収入は副次的な意味しかもっておらず、農作業は、休日に行うか、ないしは委託している。とりわけ若い世代には、全く農作業に従事しない人も増加した。

とはいえ黒崎と深田の間では、むしろ近年になってその性格の違いが明確になってきた面もないではない。たとえばそれは観光に対する取組みのあり方について見られる。橋立地区内には、北浜（田尻、小塩）、橋立、黒崎、片野それぞれに観光協会が組織されており、観光施設としても、3カ所の海水浴場の他、北前船資料館、美術館、野鳥観察施設、国民宿舎や民宿等があって、県内からの行楽客の他、特に近在の温泉郷の宿泊客の観光地として、従来も地区の経済に一定の役割を果たしてきたし、今後の発展の可能性についても、期待が大きい。もっとも黒崎に限れば、近年までは地先の浜が夏期の間、海水浴場として利用されていて、浜茶屋が1軒ある他は、駐車場が育友会によって管理され、収益がその運営にあてられてきた程度であった。しかし1980年代後半に入って、黒崎、深田両集落にまたがる約40haの丘陵南側の山林を、ゴルフ場として開発する計画がもちこまれ、用地買収がなされた。その後、ゴルフ場計画は頓挫したが、1990年代に入ってテーマパーク「加賀百萬石時代村」計画が浮上し、1996年4月オープンを目指して、調査時点では建設が進行中であった。この計画によれば、年間100万人の集客を見込んでおり、従業員とその家族数十世帯、100人以上が集落地内に新たに居を構えることになる。ゴルフ場計画にせよ、テーマパーク構想にせよ、それらはもともと外部資本によって持ちこまれたもので、集落成員の反応も、必ずしも一様ではない。すなわち、地権者による用地売却のことは別にしても、テーマパーク開設にともなう道路などのインフラ整備、雇用の確保、人口増加などの面を積極的に評価する人々がいる一方で、交通量増加による弊害を心配する声もあり、また今日でも計画に無関心な人も少なくない。ただ傾向としては、黒崎において、人口増加にともなう小学校存続の見通しが得られたことを含め、肯定的な評価が多いのに対し、深田では総じて関心がより薄いように見うけられた。このことは、従来からの観光へのかかわりの有無とも、多少は関係があるのかもしれない。

IV お わ り に

黒崎と深田は、今日見る限りでは、集落としての外見上も、その生活の実態にも、さほど大きな差はないように見える。しかしかつては立地条件もある程度異なっていたし、さらに集落の生活のありかたは、単に各々の立地に規定されるだけでなく、住民の主体的な意志、選択の結果として、相当に異なっていた。そのことは黒崎、深田ばかりでなく、橋立地区の集落全体を通していえることであり、たとえば橋立から特に多くの北前船主が輩出したこと、片野からは多くの船員が出ていたこと、などは、立地条件のみから説明できることではない。そして、そのような集落の個性は、一方では深田の大工、石工などの職人が、橋立の船主をパトロンとするといった、集落間の一定のつながりのありかたをも、造りあげてきた。こういったつながりは、いうまでもなく橋立地区内で完結していたわけではなく、大聖寺や、橋立と同じく北前船主が多かったことで知られる、片野西方の塩屋、瀬越などとの関係でも、ある程度言えることであろう。

しかし1960年代後半から今日にかけて、そういった集落の個性と、それに基づくつながりはしだいに薄れ、同時に交通手段の発展、整備にともなって人々の行動圏、通勤圏が拡大したことにより、小松や片山津などの地域との関係が、より重要となってきた。とはいえ、今日でも各々の集落の住民の間で、自らの住む集落の独自性に対する意識が完全に失われたわけでは決していない。それは集落を基礎とする組織やそこでの祭礼のような活動、さらには観光開発といった、集落の独自性を外部にアピールする性格を強く持つ事業への取り組みなどにおいて、はっきりした形をとってあらわれることになる。そういった集落の個性のありかたに、今後とも注目してゆきたいと考えている。

本報告書も、学部3年生を主とした調査実習をもととしているという制約から、記述にも分析にも多くの不正確、不十分な点を含んでいると思われる。関係者各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

- 1) 従来の報告書の一覧は、巻末の参考文献参照。調査実習の目的、方法や、報告書刊行の意図については、特に『郊外化する農山村－鍋谷』および『町野町金蔵－文化人類学の視点から』のそれぞれP. 1～2で述べている。